

# 非鉄金属概況

日本鉱業協会 企画調査部

## 金

### 【海外】

#### 1. 価格推移

7月相場	高値	安値
ロンドン相場(\$/toz)	: 1,370.00 (6日)	1,313.15 (25日)
国内建値(円/g)	: 4,566 (20日)	4,424 (1日)
為替相場(円/\$、TTS)	: 101.81 (11日)	108.29 (21日)

7月の海外金相場は1日に\$1,331.75/toz(トロイオンス)でスタート、上旬にかけては対主要通貨でのドル安を受けて金を買われ、ジリ高基調で推移した。6日には年初来高値の\$1,370.00まで上伸、2014年3月以来2年4か月ぶりの高値をつけた。ところが、6日を境目に反落、8日の米雇用統計発表を控えて調整局面入りした。8日に米労働省が発表した6月の雇用統計では、非農業部門の雇用者数が前月比で28万7千人増え、前月改訂値から大きく持ち直したことでドルが上昇、その分金は後退した。

前月の英国の欧州連合(EU)離脱決定に伴う市場の混乱を受け、実物資産の裏付けがある金はこの間買われてきたが、中旬入りすると、日米の株式相場上昇などで市場心理が改善したことから利益確定を目的とした売りが続き、続落した。

下旬入り後も、金がさらに反落した。25日にはドル相場高を背景に下落し、\$1,313.15と前月末以来の安値水準に沈んだ。その後、日米欧の金融政策を巡り、様子見状態が続いたが、27日に米連邦準備理事会(FRB)が米連邦公開市場委員会(FOMC)で利上げを再度見送ったことでドル安が進行、それを受ける形で金が小反発した。29日には\$1,342.00まで上げて越月した。

#### 2. 為替相場推移

7月の為替相場は1日に\$1=103.98円(TTS相場、以下同じ)と円高基調を保ってスタート、6日に世界経済への先行き不安の強まりから、比較的安とされる円と日本国債に資金が集中したことで、\$1=102.10円をつけた。さらに原油相場や欧米株価の下落から8日には円が\$1=101.96円まで買い進められ、英国が欧州連合(EU)離脱を決めた直後の前月24日以来の円高水準となった。8日発表された6月の米雇用統計で米景気の底堅さが改めて意識され、統計発表直後は円売り・ドル買いが進

行したものの、その後円の買い戻しが入り、海外市場では銀行間取引で\$1=99 円台をつけ、国内でも前月 24 日以来 2 週間ぶりの\$1=100 円台割れとなった。

週明けの 11 日にはその流れを受け、\$1=101.81 円(こちらも前月 24 日以来の円高水準)をつけたが、12 日には日経平均株価が上昇していることが好感されて\$1=103 円台前半まで下落した。さらに米株価が 12 日に 1 年 2 か月ぶりに最高値を更新、原油相場も大幅に上昇したことから、円から資金が離れて円が続落、週末の 15 日には 1 か月ぶりに\$1=106.64 円と円安・ドル高水準となった。

下旬入りしても、米景気の堅調見通しや欧米株式相場の上昇傾向を背景に円売り・ドル買いが優勢で、21 日には\$1=108.29 円まで円が下げた。しかし、22 日には前日の黒田日銀総裁のラジオ番組での発言をきっかけに日銀が思い切った追加金融緩和に踏み込むとの期待が後退し、\$1=106.71 円まで急伸した。その後、27 日の米連邦準備理事会(FRB)の利上げ見送り声明から円高・ドル安基調が再燃、29 日には\$1=105.42 円をつけて越月した。

対ユーロでも円は 2 か月連続で大幅に上昇した。11 日には€1=112.72 円と前月に引き続き、2012 年 12 月以来 3 年 7 か月ぶりの円高・ユーロ安となった。中旬では、円が緩む場面も散見されたが、月末では再び円高・ユーロ安が進展した。

## 【国内】

### 1. 建値推移

7 月の国内金山元建値は 1 日に 4,424 円/g(グラム)と前月末より上昇してスタート、円高基調ながらも、海外相場の上げから上昇基調で推移、中旬の 12 日には 4,500 円台に到達し、本年 5 月以来の高値となった。その後、海外相場は下げに転ずるも、円が小安くなったことから続伸し、20 日には 4,566 円と月間最高値をつけるとともに、本年 3 月以来 4 か月ぶりの高値となった。

下旬にかけては、海外相場の下押しから、その価格水準を下げ、4,500 円前後での小浮動推移に終始した。29 日には 4,510 円をつけて越月した。

### 2. 金地金生産・出荷・生産者在庫(2016 年 6 月分=平成 28 年 6 月分)

生産	: 10,469 kg	(前月比 6.8%増、前年比 10.8%増)
出荷	: 10,280 kg	(前月比 6.2%増、前年比 2.5%減)
在庫	: 5,199 kg	(前月比 3.8%増、前年比 46.7%増)

(生産、出荷、在庫の出典は経産省生産動態統計調査)

6 月の生産は前月比、前年同月比ともプラス。前年同月比は 3 か月ぶりの増。出荷は前月の反動から前月比増だが、前年同月比は 3 か月ぶりの減。価格が下げ基調だったことも、出荷へプラスに働いた。在庫は生産増から前月比、前年同月比とも増。前年同月比は 6 か月連続の増。

## 銅

### 【海外】

2016年7月のLME銅相場は上旬にかけて英国のEU離脱(ブレグジット)の影響が尾を引き、ポンドが対ドルで31年ぶりの安値に暴落、英国経済の悪化、イタリアの銀行融資の不良債権化、ドイツ銀行の破たんなどの懸念が広がるなかを\$4,700/t際まで下押ししたが、その後は米国経済の好調持続、英国、日本、中国などの景気刺激策発動期待から世界経済をめぐる不安感が徐々に沈静化し、ロングポジション志向が高まったことから\$4,800~4,900/t圏を推移した。

米国経済は、6月の非農業雇用者数が昨年10月以来の大幅増、新規失業保険申請件数は7月30日までで73週間連続の300千人割れ、6月の住宅着工件数と建設着工許可件数はともに今年2月以来の高水準、新築一戸建て住宅販売戸数が2008年2月以来の高水準、7月のHISマークイット製造業購買担当者景気指数(PMI)が2015年10月以来の高水準を記録するなど堅調だった。こうしたなか、米連邦公開市場委員会(FOMC)は27日、金利の据え置きを決定したが、米国経済の目先のリスクは後退したとの認識を示し、年内利上げの可能性は残した。

中国経済は、今年第2四半期GDP成長率が前年同期比6.7%と前期と同水準で、四半期ベースでは世界金融危機以降最低の伸び率と失速気味だが、政府の目標6.5~7%の範囲内にはとどまった。6月の工業生産伸び率は3か月ぶり、小売売上高伸び率は2015年12月以来の高水準であった。一方、1~6月の固定資産投資伸び率は前年同期比9.0%増と1~5月に比べ鈍化した。

供給関連では、アングロアメリカンのエルソルダード銅鉱山(チリ)で労働協約更改交渉が決裂、労組が7月8日に無期限ストライキに突入、22日までストが続き、この間の同鉱山の操業度が大幅に低下した。銅鉱山の昨年の生産実績は36千t。

ダンディープレシヤスメタルズはツメブ銅製錬所(ナミビア)が7月22日、停電に見舞われ、改修工事のため操業を3週間停止すると発表した。停電の影響でオースメルト炉に冷却水が流入した。同製錬所は世界で数少ない高砒素銅精鉱を処理できる製錬所。

需給状況については、国際銅研究会によれば、2016年1~4月の世界の銅鉱石生産は前年同期比4.3%増6,134千t、地金生産は4.5%増の7,688千t、消費は6.3%増の7,806千t、この結果、地金需給バランスは前年同期の+13千tから▲119千tへと供給不足に転じた。報告在庫は前年比横ばいの1,558千t、在庫/消費比率は3.4週間から3.2週間へとほぼ横ばい。

鉱石生産の内訳は精鉱が5%増加、SXEWは横ばいであった。国別には過去2年

間に新規稼働と能力増強があったペルーが 51%増加したほか、カナダと米国が回復、メキシコが能力増強により、モンゴルはオユトルゴイ鉱山の立ち上げにより増加した。しかしながら、チリは 4%減少し、コンゴ民主共和国は減産により 13%減少した。地域別にはアメリカが 7%、アジアは 4.5%増加したが、ヨーロッパは横ばい、アフリカは 5%、オセアニアは 1%減少した。鉱山稼働率は 83.4%でほぼ横ばい。

地金生産の内訳は一次生産が 4%、二次生産は 5.5%増加した。国別には中国が 8%、米国は 18%増加したが、コンゴ民主共和国とザンビアは価格下落による減産のため減少した。地域別にはアメリカが 9%、アジアは 7%、オセアニアは 14%増加、アフリカは 15%、ヨーロッパは 3%減少した。製錬所の稼働率は 82.2%から 84.3%に上昇した。

消費は中国の見掛け消費が 14%増加した。ネット輸入が 30%増加したことによるもの。中国を除く世界の消費は 1%減少した。地域別にはヨーロッパが 6%、アジアは 9%増加(中国を除くアジアは 3%減少)、アフリカは 20%、アメリカは 4.5%減少、とオセアニアは横ばいであった。

## 【国内】

### 1. 建値推移(千円/t)

7/1	540	7/6	530	7/11	520	7/14	550	7/20	570	7/27	560
8/1	550										

### 2. 生産・出荷・在庫

平成 28 年(2016 年)6 月の銅地金生産は前月比 0.2%減、前年同月比 0.4%減の 131.1 千tと 2 か月連続の前年比減となった。出荷は各 14.0%増、5.9%増の 139.2 千tで前月比が 4 か月ぶり、前年比は 2 か月連続の増加。内訳は内販が前月比 14.6%増、前年比 0.9%増の 82.4 千tで前年比は 14 か月ぶりの増加となった。輸出は前月比 13.2%増、前年比 14.2%増の 56.9 千tで、それぞれ 2 か月、3 か月連続の増加。内販のうち電線向けは前年比 0.1%減の 52.2 千tと 13 か月連続の減少、伸銅品向けは 7.8%増の 26.8 千t。在庫は前月比 7.4%減、前年比 12.0%減の 101.1 千tで前月比が 2 か月ぶり、前年比は 9 か月連続の減少となった。

### 3. 需要部門別動向

日本電線工業会によれば、平成 28 年(2016 年)6 月の銅電線出荷は前月比 13.6%増、前年同月比 5.5%減の 55.9 千t(推定)と 7 か月連続の前年比減。うち内需は前年比 4.2%減の 54.8 千tで 12 か月連続の減少、輸出は 43.0%減の 1.1 千tで 7 か月連続の減少。内需の部門別には、自動車は 2 か月連続の増加となったが、電気機械は 20 か月、通信は 5 か月、建設電販は 4 か月連続、電力は 3 か月連続の減

少となった。

日本伸銅協会によれば、平成 28 年 6 月の伸銅品生産は前月比 10.3%増、前年同月比 4.9%増の 68.8 千t(速報)と前年比は 2 か月連続の増加となった。うち内需向けは前年比 6.3%増の 57.6 千tと 2 か月連続の増加、輸出は 1.9%減の 11.3 千tで 15 か月連続の減少。品種別には、エアコン向けの銅管が 3 か月、半導体、コネクタ、自動車向けの銅条は 2 か月連続で増加、自動車端子向けの黄銅条は再び増加したが、コネクタ向けの青銅板条は一部メーカーの生産停止(8月末)も相まって 14 か月連続かつ大幅な減少となった。

## 鉛

### 【海外】

2016 年 7 月の LME 鉛相場は上旬にかけては英国の EU 離脱(ブレグジット)の影響が尾を引き、ポンドが対ドルで 31 年ぶりの安値に暴落、英国経済の悪化、イタリアの銀行融資の不良債権化、ドイツ銀行の破たんなどの懸念が広がるなかを \$1,800/t 割れへと軟化した。月半ばにかけては世界経済をめぐる不安感が徐々に沈静化し、ロングポジション志向が高まったことから \$1,900/t 水準に上昇したが、その後自律反転し、月末には \$1,800 を割り込んだ。

米国経済は、6 月の非農業雇用者数が昨年 10 月以来の大幅増、新規失業保険申請件数は 7 月 30 日までで 73 週間連続の 300 千人割れ、6 月の住宅着工件数と建設着工許可件数はともに今年 2 月以来の高水準、新築一戸建て住宅販売戸数は 2008 年 2 月以来の高水準、7 月の HIS マークイット製造業購買担当者景気指数(PMI)は 2015 年 10 月以来の高水準を記録するなど堅調だった。こうしたなか、米連邦公開市場委員会(FOMC)は 27 日、金利の据え置きを決定したが、米国経済の目先のリスクは後退したとの認識を示し、年内利上げの可能性は残した。

中国経済は、今年第 2 四半期 GDP 成長率が前年同期比 6.7%と前期と同水準で、四半期ベースでは世界金融危機以降最低の伸び率と失速気味だったが、政府の目標 6.5~7%の範囲内にとどまった。6 月の工業生産伸び率は 3 か月ぶり、小売売上高伸び率は 2015 年 12 月以来の高水準であった。一方、1~6 月の固定資産投資伸び率は前年同期比 9.0%増と 1~5 月に比べ鈍化した。

供給関連では、ボリビア鉱業省が 7 月 25 日、溶鉱炉の爆発事故により 2015 年 11 月以来操業を停止していた中国営カラチパンパ鉛銀製錬所の操業を 10 月に再開すると発表した。同製錬所は 30 年間の休止期間を経て、2014 年 9 月に再開されたが、同事故によって操業停止を余儀なくされていた。精鉱処理能力は 51 千 t/年。

需給状況については、国際鉛亜鉛研究会によれば、2016 年 1~5 月の世界の鉛

鉛生産は前年同期比 5.0%減の 1,845 千t、地金生産は 1.9%減の 4,275 千t、消費は 3.3%減の 4,222 千t、地金需給バランスは前年同期の▲9 千tが+53 千tとほぼバランス推移した。

鉛生産はヨーロッパが 4.4%増加したが、アメリカは横ばい、アジアは 2.0%、オセアニアは 29.7%、アフリカは 2.9%減少した。国別にはオーストラリアと米国が減少した。地金生産はアメリカが 2.1%、オセアニアは 9.2%増加、ヨーロッパ、アフリカは横ばい、アジアは 4.3%減少した。国別には中国の減少が主因。消費はヨーロッパが 9.8%、アメリカは 1%増加、オセアニアは横ばい、アジアは 8.1%、アフリカは 2.3%減少した。国別には中国、米国、韓国の減少がヨーロッパ諸国の増加を相殺した。5 月末の地金の報告在庫は前年同月比 3.4%増の 505 千t、在庫/消費比率は 2.5 週間から 2.6 週間へとほぼ横ばい。

中国は鉛生産が 1.4%減の 850 千t、鉛精鉛輸入は 19.9%減の 286 千t、地金生産は 10.7%減の 1,602 千t、地金のネット輸出は 19 千tから 12 千tに減少、この結果、見掛け消費(生産+輸入-輸出±上海取引所在庫)は 12.4%減の 1,577 千tとなった。

## 【国内】

### 1. 建値推移(千円/t)

6/1 245    6/14 239    6/27 232    7/1 240    7/13 250    7/22 259  
8/1 244

7 月は LME 鉛相場が上旬から中旬にかけて堅調だったこともあり、鉛建値は緩やかながらも上昇基調を辿った。ただし、円高の影響によりその伸びは抑えられた。

### 2. 鉛地金生産・出荷・生産者在庫(2016 年 6 月分=平成 28 年 6 月分)

生産 : 16,635t (前月比 4.2%減、前年比 5.9%減)  
出荷 : 17,263t (前月比 24.6%増、前年比 0.3%増)  
在庫 : 24,627t (前月比 2.6%減、前年比 9.4%減)

(生産の出典は経産省生産動態統計調査、出荷・在庫は日本鉛業協会受払)

6 月の生産は竹原製錬所の減産で前月比、前年同月比とも減。前年同月比は 6 か月ぶりの減。出荷は前月の反動と蓄電池向けの増加から前月比大幅増。前年同月比も 4 か月連続の増。自動車用蓄電池の需要が堅調なことから電気鉛販売も増加基調。在庫は生産減、出荷増から 3 か月ぶりの前月比減、前年同月比も 9 か月連続の減と減少基調。

### 3. 需要部門動向

6 月の自動車生産台数は前年同月比 1.0%減の 804,201 台となり、2 か月ぶりに前

年同月を下回った。

乗用車は前年同月比2か月ぶりのマイナス、トラックも同14か月連続のマイナス、バスも同7か月連続のマイナスとなった。

1～6月の生産台数は、前年同期に比べ3.4%少ない4,494,583台だった。上半期として前年実績を下回るのは2年連続となった。

6月の自動車輸出台数は前年同月比1.1%増の408,076台となり、2か月連続で前年同月を上回った。

一方、6月の二輪車生産台数は前年同月比11.1%減の31,142台と2か月連続で前年同月を下回った。

(一社)電池工業会の調査によると、5月の自動車用鉛蓄電池のメーカー販売個数は、新車用、補修用、輸出用を併せた総合計で1,444千個(前年同月比1%増)と再び上昇したが、自動車用以外の鉛蓄電池は521千個(同6%減)と9か月連続で減少した。その結果、鉛蓄電池の出荷はトータルで1,965千個(同1%減)と2か月連続で低下した。

#### 鉛関連製品生産統計

		5月	6月(速報値)
自動車	数量(台)	656,814	804,201
	前年同月比(%)	101.7	99.0
		4月	5月
自動車用鉛蓄電池	数量(鉛量t)	14,526	11,828
	前年同月比(%)	95.0	94.1

(出所:(一社)日本自動車工業会, 経済産業省生産動態統計調査)

#### 亜鉛

#### 【海外】

2016年7月のLME亜鉛相場は上旬にかけては英国のEU離脱(ブレグジット)の影響が尾を引き、ポンドが対ドルで31年ぶりの安値に暴落、英国経済の悪化、イタリアの銀行融資の不良債権化、ドイツ銀行の破たんなどの懸念が広がるなかを\$2,100/t割れへと軟化した。しかし、その後は世界経済をめぐる不安感の解消に亜鉛需給ファンダメンタルズの改善見通しも相まって、ロングポジション志向が高まったことから一段高となり、月末にかけて\$2,200/t台を堅調に推移した。

米国経済は、6月の非農業雇用者数が昨年10月以来の大幅増、新規失業保険申請件数は7月30日までで73週間連続の300千人割れ、6月の住宅着工件数と

建設着工許可件数はともに今年2月以来の高水準、新築一戸建て住宅販売戸数は2008年2月以来の高水準、7月のHISマークイット製造業購買担当者景気指数(PMI)は2015年10月以来の高水準を記録するなど堅調だった。こうしたなか、米連邦公開市場委員会(FOMC)は27日、金利の据え置きを決定したが、米国経済の目先のリスクは後退したとの認識を示し、年内利上げの可能性は残した。

中国経済は、今年第2四半期GDP成長率が前年同期比6.7%と前期と同水準で、四半期ベースでは世界金融危機以降最低の伸び率と失速気味だったが、政府の目標6.5~7%の範囲内にとどまった。6月の工業生産伸び率は3か月ぶり、小売売上高伸び率は2015年12月以来の高水準であった。一方、1~6月の固定資産投資伸び率は前年同期比9.0%増と1~5月に比べ鈍化した。

需給状況については、国際鉛亜鉛研究会によれば、2016年1~5月の世界の亜鉛鉱石生産は前年同期比7.7%減の5,178千t、地金生産は3.6%減の5,533千t、消費は5,597千tで横ばい、地金需給バランスは前年同期の+177千tから+▲64千tへと供給不足に転じた。

鉱石生産はアフリカが6.5%増加したが、アジアは横ばい、アメリカは4.9%、ヨーロッパは1.3%、オセアニアは48.8%減少した。国別にはオーストラリア、インド、アイルランド、ペルー、米国が減少した。地金生産はアフリカが22.0%増加したが、オセアニアは横ばい、アジアは4.1%、ヨーロッパは2.1%、アメリカは5.7%減少した。国別にはインド、日本、米国が減少、韓国、ナミビアが増加した。消費はアジアが3.4%、ヨーロッパは2.1%、オセアニアは11.5%増加したが、アメリカは15.8%、アフリカは7.0%減少した。国別には中国の増加が日本、韓国、台湾、米国の減少に相殺された。5月末の地金の報告在庫は前年同月比2.8%減の11,442千t、在庫/消費比率は5.4週間から5.2週間へと横ばい推移した。

中国は鉱石生産が5.5%増の2,161千t、亜鉛精鉱輸入は26.0%減の373千t、地金生産は2,485千tで横ばい、地金のネット輸入は111.9%増の118千t、この結果、見掛け消費(生産+輸入-輸出±上海取引所在庫/国家備蓄)は8.2%増の2,705千tとなった。

## 【国内】

### 1. 建値推移(千円/t)

6/1	262	6/7	268	6/10	274	6/15	265	6/20	256	7/1	268
7/6	265	7/12	271	7/15	283	7/21	292	7/26	289	8/1	280

7月はLME亜鉛相場が上旬から中旬にかけて、\$2,100/t水準から\$2,200台へ上昇したこともあり、下旬入り直後までは上昇基調を辿り、下旬には292千円/tまで上伸した。その後は円高とLMEの反落から下げに転じた。292千円は前年7月以来の高値。

## 2. 亜鉛地金生産・出荷・生産者在庫(2016年6月分=平成28年6月分)

生産 : 46,969t (前月比 0.4%減、前年比 5.2%減)

出荷 : 44,182t (前月比 12.3%増、前年比 0.9%減)

在庫 : 89,292t (前月比 3.3%増、前年比 4.3%減)

(生産の出典は経産省生産動態統計調査、出荷・在庫は日本鉱業協会受払)

6月の生産は前月比、前年同月比とも減。前年同月比は前年の播磨事業所の生産停止から11か月連続の減。出荷は反動増で前月比増。しかし、前年同月比では8か月連続の減。伸銅品、めっき鋼板、ダイカスト向けが増えるも、前年同月比では依然マイナス。在庫は生産増から3か月連続の前月比増だが、前年同月比は3か月連続の減。

## 3. 需要部門動向

6月の鉱工業生産指数は前月比1.9%増、前年同月比1.9%減の96.5(季節調整済、2010年=100基準、速報値、以下同じ)となった。前月比は2か月ぶりのプラス、前年同月比は3か月連続のマイナス。化学製品の生産が好調だった他、自動車の生産も伸びた。

4~6月は96.1となり、1~3月から横這いだった。

経産省は生産の基調判断を「一進一退」から「一進一退だが、一部に持ち直し」に上方修正した。基調判断の引き上げは2015年9月以来。

6月は15業種中13業種が前月から上昇した。内訳をみると、化学工業が前月比4.0%上昇したほか、輸送機械は普通車が好調で同1.6%上昇した。電子部品・デバイスも同1.6%伸びた。

6月の出荷指数は前月比1.2%増の94.6と、生産指数同様2か月ぶりのプラス、前年同月比は2.2%減と7か月連続のマイナスとなった。

一方、在庫指数は前月比±0.0%の113.9と横這い。在庫率指数は前月比1.4%減の116.2と2か月ぶりに低下した。

大企業の生産見通しを示す製造工業生産予測指数では、7月が前月比2.4%の上昇、8月は同2.3%の上昇を見込んでいる。

5月の亜鉛めっき鋼板生産(次工程用消費を除く)は前年同月比23か月連続の減と依然低迷。数量も20か月連続の100万t台割れ。しかし2か月連続の80万t台割れとはならず。

5月の伸銅品生産量は62,389t(確報値、対前年同月比+1.7%)(対前月比▲6.0%)、15か月振りに対前年同月比プラスに転じた。銅条、銅管、黄銅棒の主要三品種が全てプラス。銅条は13か月振りに対前年比プラスに転じ、銅管は2か月連続のプラス、2016年2月以降1万tに迫る水準が続いている。黄銅棒は2か月振り

のプラスの 14,856t だったが、3 月に 17 千 t 近くまで伸びたことに比べれば低い水準だった(前年同月比、内需+10.1%、輸出▲42.8%)。

その他黄銅関連では、黄銅条が 7,559t。対前年比は 2 か月振りにマイナス(▲4.3%)で、8 千 t 割れとなった(前年同月比、内需▲6.5%、輸出+11.3%)

#### 亜鉛関連製品生産統計

		4 月	5 月
亜鉛めっき鋼板	数量(t)	785,457	835,684
	前年同月比(%)	96.7	96.4
黄銅製品	数量(t)	28,094	26,064
	前年同月比(%)	101.1	101.2
亜鉛ダイカスト	数量(t)	1,517	1,358
	前年同月比(%)	80.5	87.4
亜鉛華	数量(t)	3,842	4,150
	前年同月比(%)	83.3	94.8

(出所:経済産業省生産動態統計調査)